

□1月21日礼拝説教(隅野徹牧師短縮版)「神の御前で賢くふるまう」(ルカ16:1～13)

この話によってイエスが教えようとしておられる最も中心的なことは、人間の友達を得ることの大事さではないのです。では最も大事なことは何かというと、それは9節だと思いません。

ここで教えられていること。それは、私たちが地上の命を終える時に、永遠の住まいに迎え入れてくれる友を得ることの大切さです。「私たちを」「永遠の住まいに入れてくれる人」とは、神以外にありえません。その神と「不正にまみれた富で友達になる」とは一体どういうことでしょうか？それは結局、「世の中の人々、とくに困難の中にある人々を、自分に預けられたもので助けることは、神、イエス御自身を助けるのと同じだ」ということなのだと思います。

マタイによる福音書の25章31節以下、イエスなされた有名なたとえ話があります。「飢えていたり、着るものがなかったり、病気にかかっている人を助けることは、神御自身を助けることになるのだ」という教えですが、特に有名なマタイ25:40は次のように教えています。

『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

私たちは神から与えられている富を、完全にうまく管理できず、ときには自分の私利私欲のために用いることのある「弱いもの」です。しかしその富を「永遠の住まいに入るために用いることができるのだ」とイエスは教えておられるのです。

周りの人々に配慮する、とくに苦しみの中にある人に配慮する、そのために「神から委ねられた富を用いる」ことは、神自身に配慮するのと同じなのだとすることを今回強く思わせられました。神を愛し、隣人を愛して生きることは人生の最大の目的です。神から私たちが管理を委ねられている「富」はそのための「手段」にすぎないのです。そういう教えの締めくくりとして、13節の「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」という教えが出てくるのだということを中心に刻み、私たちが日々神の前でどのように生きていくべきかを考えてまいりましょう(終)